

## 書評

# 山口謠司『日本語を作った男 上田万年とその時代』 (集英社インターナショナル 2016年)

柴田 秀一\*

### はじめに

もう四十数年前の事だった。第二次大戦中の疎開の様子がテレビ画面から流れていた。その当時の、勿論白黒のフィルムで、蒸気機関車が着いた駅の名が平仮名で書かれていたのに、中学生の私は何処の駅名だか分からなかった。「ふふか」いや、この時代右から読んだ筈だ。すると「かふふ」。どこの事だろう。

駅は「甲府」であった。ひらがなだと「かふふ」と書く。「甲」は文字で書くと「かふ」となる。「ましよう」は「ませう」と書いた。「文字として書く言葉」と、「喋る言葉の音」が何故昔は違っていたのか。「旧仮名遣い」である。どうしてそんなに面倒臭い、分かりにくいことを終戦までずっとやっていたのかと感じた瞬間だった。そして高校生となって文学史の時間に「言文一致」運動を知った。運動を広めた小説家の二葉亭四迷、坪内逍遙、山田美妙、尾崎紅葉……。

本書はそういう人達が執筆活動をした時代に、日本語を言文一致で国家として統一することに奔走した日本人初めての博言学（言語学）者である上田万年（うへだ・かずとし 1867～1937年）の生きた明治の時代を描いた、言文一致運動の記録である。と同時に、明治時代に言葉を記した書物の出版と流通の様子を記したメディア史の本でもある。

### 本書の構成

#### 第1部 江戸から明治～混迷する日本語

- 第1章 明治初期の日本語事情
- 第2章 万年の同世代人と教育制度
- 第3章 日本語をどう書くか
- 第4章 万年、学びのとき
- 第5章 本をあまねく全国へ
- 第6章 言語が国を作る
- 第7章 落語と言文一致

#### 第2部 万年の国語愛

- 第8章 日本語改良への第一歩
- 第9章 国語会議
- 第10章 文人たちの大論争

---

\*しばた しゅういち 日本大学法学部新聞学科 教授

- 第11章 現言文一致への道
- 第12章 教科書国定への困難
- 第13章 徴兵と日本語
- 第14章 緑雨の死と漱石の新しい文学
- 第15章 万年万歳 万年消沈
- 第16章 唱歌の誕生
- 第17章 万年のその後

### 【明治の国作りと言葉作り】

「舞姫」「高瀬舟」等を著し、立派な八の字の鼻髭を蓄えた陸軍の森凜太郎（鷗外）医学博士（46）が、1908（M41）年「臨時仮名遣調査委員会」第4回会合で、2時間に亘り言文一致に反対する演説をぶったところから本書は始まる。「鷗外」は当時、仮名では「あうぐあい」と書いた。だれの名前か分からない。鷗外はゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe 1792～1832）のことを「ギョオテ」と書いた。

「ギョエテとは俺の事かとゲーテ云い」との「変な表記」の代表のような川柳を覚えていたが、万年の憧れた齋藤緑雨が鷗外を揶揄した言葉として本書中後半に出てくる。

日本語を記すには、明治時代は大きく分けて3通りの方法があった。平安時代から通じる「和文脈」、それまで公文で使われていた「漢文訓読体（漢文訓読体に間に和語を加えた雅俗折衷体もある）」と「言文一致体」である。

何故、明治時代「喋る言葉」と「書く言葉」が一緒になった方が良かったのかを著者は、明治維新＝近代国家への道として、分かり易く書く。

「方言改良論」（1888・M21年 青田 節 あおた・せつ著）のエピソードを引いて、「東京から福島に行く汽車内で、青田のほかには英国人と仙台出身の女性がいた。仙台出身の女性の話す言葉（方言）は全く理解できず、それに対し、英国人とは少しばかり英語ができるだけで話が通じた」という。東京の人間は同じ日本なのに東北の方言が全く理解できず。わずかな英語の知識で外国人のほうに話が通じるという、なんとも笑えない状況だった。

では、江戸時代、参勤交代で来ていた大名同士は意思が通じたのか、江戸城に行き言葉が分かったのか。それは、共通の教養として「能楽」を嗜んでいたからで、それは候文（そうろうぶん）で記されており、彼らには共通する分かる言葉があったのだ。ところが市井の人には共通語がなく容易に意思の疎通が図れなかった。もし軍隊で兵に命令する隊長の言葉が分らなければ、統率が取れない。

近代国家、中央集権国家として国が発展するためには、言葉の統一が不可欠であった。

### 【外国人から日本語を習う、そして留学、国家主義の言語】

上田万年は東大で、いわゆる「お雇い」英国人のバジル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain 1850～1935）から博言学（現在の言語学）を学ぶ最初の日本人となる。チェンバレンは日本人の学生に日本語文法を教えた。外国人に日本語を教わるのは、滑稽ともとられるが、当時日本には比較言語学などもない。チェンバレンは11か国語を習得した語学の天才であり、「古事

記」の英訳をしたことで知られるが、アイヌ語の研究もし、アイヌ語が完全に独立した言葉で日本語とは同系統の言葉ではないと書き、このことは後にアイヌの研究をする金田一京助（1882～1971）もその説に誤りがないと明らかにしている。

そうした優秀な師から教えを受けた万年は、政府の命で1890（M23）年から1894（M27）年ドイツに留学する。大日本帝国の国語の創設と博言学的な日本語研究の推進という二つの目的を持ち、ベルリンで研究をした。

ドイツでは大出版社（ノーベル文学賞受賞作家を3人出したS・フィッシャー）が出来、印刷・出版が文化の形成に大きな役割を果たしていた。また、そこで万年は、国家と国の言葉の統一が必要との考えを持つ。それは、ドイツが鉄血宰相ビスマルクによって領土を拡大し、その間「ドイツ語浄化運動」と呼ばれる母国語の統一活動をし、ゲーテや、日本人には「ベートーヴェン交響曲第9番合唱付き」の歌詞で良く知られるシラー（Johann Christoph Friedrich von Shiller ヨハン＝クリストフ＝フリードリヒ＝フォン＝シラー 1759～1805）達がそれを広めた。そうした歴史の後にドイツ留学をした万年は言語が国家をつくり、その言語の統一を見ることが必要であると考えた。フランスでも同じように言語の統一が図られていた。

今であれば、多様化、グローバル化の世の中であるが、明治時代にはこうした国粹主義的思想はごく普通に考えられ、急進的な人たちもまたいた。

果たして、万年の帰国後3年の1900（M33）年、文部省はこれまであった、「読書」「作文」「習字」の3つをまとめて「国語」という科目を作る。著者は、まさに「朝廷—幕府—藩」という旧体制を脱して「大日本帝国」という国家の体制が「国家」「国民」「国語」という新しい次元に変化したことを意味するものでもあったと述べている。

### 【言文一致と新しい仮名遣いに向けての努力】

1897（M22）年、万年は「国字改良会」を発足させ、「国家こそが言語に責任をもって対処すべき」との主張を展開する。

万年は古代日本語では「はひふへほ」が「パピプペポ」と発音されて、それが「ファ・フィ・フウ・フェ・フォ」になり「ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ」に変化したとの説を比較言語学の立場から述べた。これは、のちに万年の最も大きな記念碑的論考となる。

そして、更に1900（M33）年3月「言文一致会」を作り、万年は「卒業」を「そつぎょー」、「入学」を「にゅーがく」と「ー」のばす音、長音符（音引きともいう）のルビを初めてふった。

この長音符を含む字音仮名遣いは1900（M33）年、文部省が小学校令施行規則で定めた字音仮名遣い表で使われている。「ちゅう、ちゃう、てう、てふ」はすべて「ちょー」とするという。

これには漢文の素養のある人たちは反対した。つまり漢字によって「灯」は「チャウ」、「召」は「テウ」、「蝶」は「テフ」ときちんと書き分けてきたのだと合理性を主張する。

更に、1903（M35）年文部省内に「国語調査委員会」が設置される。万年が描いていた「国語会議」の具現化であった。その後、新旧仮名遣い対照表が発表されると、今よりもっと言文一致が進んでいて、「仮名遣いの改訂わ、国語教育の重大な問題である」と主格の「は」はすべて発音と一致して「わ」と書かれていたのだ。

こうして、文部省は、国語の仮名遣いを発音主義で改定することを決め、手続きが行われ、高等

教育会議で賛成多数で可決された。これで、新仮名遣いは、教科書に載る手筈であったが、文部省参事官をはじめ、枢密院、貴族院に反対者が出た為、時の牧野文相は西園寺首相と相談し「臨時仮名遣調査委員会」を設置し直し討論が行われた。その第4回、上田万年が司会をした回が本書の書き出し（序章）で、万年が言文一致の字音仮名遣いを通そうとしていた会議での森林太郎・鷗外の新字音仮名遣いの反対論の演説なのであった。

この委員会では賛成、反対あり委員会としてどちらに決するという空気ではなかったにもかかわらず、政府は委員会に対する諮問を撤回し、新仮名遣いではなく旧仮名遣いに戻す決定をした。ここに言文一致の仮名遣いの改訂はとん挫したのである。

### 【むすびに】

本書は、「大した不幸もなく、大した栄誉もなかった人の名前は忘れられやすい。東京大学で日本人で初めて言語学を教えたというくらいでは、歴史に名は刻まれないであろう。」と著者は書きながら、堂々500頁以上書いている。

上田万年とその時代との副題の通り、木版刷りの瓦版や浮世絵が発達したため、日本では金属活字導入が遅れたという特殊事情と、古くから日本橋にそうした木版の出版・書店があったが、銀座の大火で版木ごと燃えてしまい、専門学校等が多くあった神田神保町に新書店が移ってきた事などメディア史の一端を見る興味深い事柄が書かれている。

また、1890（M23）年 帝国議会開催で議事録をとる為、日本独自の速記開発されそれが、録音機などない時に落語の芸を書きとることに役立ち、更には、言文一致に窮した二葉亭四迷が坪内逍遙に相談に行くと、坪内は三遊亭円朝（1839～1900年）の落語通りにやってみたらいい。と言ったという。それで速記起こしの文章のように書いたので、実は言文一致のルーツは意外にも落語であった。だが、知識人たちの和文（和歌、古典）でもなく、公文の漢文書き下しでもない、誰が聞いても分かる表現であったから笑えるのは至極当然のことで、意味が分からなければ笑いも起きない訳なのだ。

万年の主張通り明治時代後半に言文一致が確実に行われていれば、どうであったろうか。

小職は、新聞協会にある用語懇談会で10年ほど幹事を務めていたが、戦後も外来語の字音主義が統一されていないのに苦労した。「ウオッカ」「マネジャー」「パーカ」「コンピュータ」はそれぞれ「ウオッカ」または「ウオッカ」「マネージャー」「パーカー」「コンピューター」としか言っていないのではないかと数年間協議して、ようやく用語集の改訂が認められた覚えがある。この時も本書中にある「ギョエテとは・・・」の川柳を引き合いに出して字音主義をとるべく説得したのだが、簡単にはいかなかった。活字は一字でも少なく表現したいという意見も根強かった。

言葉は移ろいやすいものであるが、意識的に変えようとするとは時間と労力がかかるものであるのは万年の100分の1の努力もしていない小職にも少しは理解できる。

(1) 斎藤緑雨（1867～1904年）「東西新聞」「今日新聞」「萬朝報（よろずちようほう）」等新聞ジャーナリズムを渡り歩いた。戯文批評に才筆を振るい文壇人を辛辣に揶揄・批判した。（日本百科全書ニッポニカ

より抄)

著者 山口謠司 (やまぐち ようじ) 大東文化大学准教授 博士 (中国学)

1963年長崎生まれ 大東文化大学卒業後、同大学院、フランス国立高等研究院人文科学研究大学院に学ぶ。ケンブリッジ大学東洋学部共同研究院などを経て、現職。専門は中国及び日本の文献学。「ん 日本語最後の謎に挑む」(新潮新書)、「てんてん 日本語究極の謎に迫る (角川選書)」、「となりの漱石」(ディスカバー携書)